

## 1. はじめに

共愛学園前橋国際大学（以下、「本学」という。）は、教育の質を担保するために学内に『内部質保証委員会』を組織し、各々のセクションが本学の教育や研究活動の課題点を見つけ、改善を行なえるように毎年、点検を実施している。本書は、2022 年度の本学の内部質保証に係る点検・評価報告書である。本学の内部質保証新体制における 2 年目の点検となるため、内部質保証に係る点検・改善・認識・公表に重点をおき、2022 年度前期までの実績を中心に評価している。

## 2. 本学の内部質保証における点検項目について

内部質保証のあり方は各大学によって異なるため、本学独自の内部質保証のあり方を構築できるような点検項目を設定している。

なお、本学に関する内部質保証を行なうのは本学自身であるが、本学は大学基準協会から第三者評価（認証評価）を受けているため、大学基準協会の基準 1 から 10 に準拠した点検項目を中心に、本学が独自に定めたものも含めて計 25 の点検項目で構成している。

## 3. 本学の内部質保証における評価基準について

本学の内部質保証点検・評価報告書は公開を前提としているため、点検項目の評価基準は客観的かつ明確にする必要がある。内部質保証委員会事務局では改善につなげることを重視して、22 年度からは新たに表 3-1 に示した 4 段階の評価とした。

また本学の内部質保証は、点検の実施、課題への改善の取組み、学内の共通認識、学外の公開を重視しているため、評価の基準には①点検、②改善、③認識、④公表の 4 つの指標を設けている。なお、これらの指標に対しては「達成」、「未達成」、「年度内に達成見込み」の三つの基準がある。

さらに本学の内部質保証の目的を究極的に言えば、本学の目的及びディプロマ・ポリシーを達成するために各組織が継続的かつ自律的に PDCA サイクルでまわる体制を整えることである。

したがって、各取組または各部署で PDCA サイクルがまわっていることをエビデンスに基づいて確認ができて、はじめて内部質保証委員会事務局では内部質保証ができる水準にある（A 評価）と評価している。一方、各視点の基準を満たしていても著しく見劣りする結果または看過できない課題がある場合には、本学の基準を満たさず改善が求められる（E 評価）と判定する。

表 3-1 4 段階評価基準

区分	評価	判定	状態
内部質保証ができる水準にある	S	内部質保証ができる水準にあり、特筆すべき事項が認められる。	4 項目指標のレベルがすべて満たされている。また、各取組が PDCA でまわるとともに、顕著な成果が認められる。
	A	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。	4 項目指標のレベルがすべて満たされている。また、各取組が PDCA でまわり、質を向上させている。
	B	内部質保証ができる水準にある。	項目 1・2 を含め、3 つの指標レベルを満たしている。
内部質保証ができる水準にない	E	水準に適合せず、改善が求められる。	項目 1・2 のいずれかの指標レベルが満たされていない。または項目 3・4 がどちらも満たされていない。
			基準には適合しているが、見劣りする結果や課題がある。
4 項目指標			指標
点検		内部質保証のための点検・評価が実施されている。	
改善		内部質保証のための点検・評価により見出された課題が改善されている。または、課題点は特になし。	
認識		改善内容または現状特に問題ないことが、学内（教職員）で共通認識されている。	
公表		点検・評価結果が学外に公表されている	

#### 4. 2022 年度 共愛学園前橋国際大学 内部質保証 点検・評価の総評

##### (1) 2022 年度の主な変更点

本学では内部質保証規程に基づき、毎年点検評価を実施しているが、それに加えて7年ごとに、より広範な「教育プログラム・レビュー評価」を行なっている。2022 年度は、この「教育プログラム・レビュー」の評価年度であったため、①「評価項目」の全面的な見直し②「評価指標」および「評価基準」の抜本的な改訂、を実施した。

例えば「評価指標」については、①点検②改善③認識④公表の4つの項目に再整理を行なったが、中でも本学の教育・研究活動に関する「③認識」の度合いを測るために全スタッフを対象に「内部質保証・認識度アンケート」を実施したことは、非常に効果的であったと自

負している。このアンケートによって、以前から認識されていた活動はより確実に、認識度がそれほど深くなかった活動についてはこの機会に新たに、情報を共有することができたからである。

また「評価基準」についても、大きな変更があった。これまでは「評価指標」の基準を全て満たした項目については「S」評価としていたが、今回からは「A」評価としたのである。「S」評価については、それら「A」評価項目の中から、複数の外部アドバイザー委員が「特に優れた本学の教育・研究活動」として選出したもののみに与える形となった。

## (2) 内部質保証会議

本学では2022年7月27日、10月12日、11月9日、12月7日に「2022年度内部質保証会議」を開催し、点検項目ごとの教育プログラム・レビューを行い、点検項目ごとにPDCAに係るチェックを行ない、概ね基準を達成していることを確認した。但し、本学の教育の質を向上させるための更なる改善等もあり、各部署や各担当者で内容を確認し、改善策を検討することが望ましい。また、自己点検評価において学内で確認した重点事項を2点ほど挙げる。

### ① 自己点検評価委員会と内部質保証委員会の関係について

今回は内部質保証委員会事務局で自己点検・評価を行ったが、本学学則第2条に研究教育活動等の自己点検評価が規定され、本学自己点検・評価委員会規程第2条に自己点検するための自己点検委員会の規定もある。内部質保証のPDCAは、内部質保証委員会が中心となって推進しているが、自己点検評価委員会はその中でも特に「評価」の部分を担当するとともに、内部質保証委員会と連携して大学認証評価のための申請書類作成や認証評価結果の学内へのフィードバックを行なっている。

### ② 具体的な目標値の設定について

前年度の取組みを踏まえて教学や運営に係る目標値を設定した。目標値の設定や達成状況について教学マネジメント本部や各担当部門が自己点検を行い、点検項目ごとの教育プログラム・レビューを実施した。

## (3) 外部アドバイザー委員会

本学の自己点検・評価（教育プログラム・レビュー）は、学内のみの視点では独りよがりな取り組みになってしまう恐れもある。そこで、学外の有識者に『外部アドバイザー委員』を委嘱し、外から見た本学の教育プログラムについて、課題点等があれば、貴重なご意見をいただく機会としている。

2023年1月6日（金）に開催された『第二回外部アドバイザー委員会』には、外部アドバイザー委員として東京大学大学院 教育学研究科 大学経営・政策コース教授の両角亜希子教授、前橋市未来創造部 青木一宏部長（前橋市 大野誠司副市長の代理）、群馬県教育委員会 高校教育課 天野正明課長、群馬経済同友会 次世代育成委員会（群馬ヤク

ルト販売株式会社（代表取締役会長）本田博己委員長の 4 名にご出席いただき、貴重な助言を得ることができた。

いただいた助言は、本学の教育プログラムや内部質保証の今後の改善に向けて、活用して行く予定である。

## 5. おわりに

大学や短大は文部科学省の定めにより、7 年毎に『自己点検・評価報告書』を作成し、認証機関による審査を受けなければならないこととなっている。

大学基準協会は、2018 年より第 3 期認証評価を行っている。内部質保証の基準も従来の 10 番目から 2 番目に繰り上げられ、第 2 期よりも PDCA サイクルの機能を重視している。

また、2021 年度大学基準協会の『達成度評価のあり方に関する調査研究報告書』では、第 3 期認証評価において、内部質保証に課題があると提言された大学は全体の 2/3 に及んでいるとの指摘があった。提言の内容は、規程の不備、規程等に基づく制度と実際との乖離、各組織の位置づけの不明確さに集約されると示されている。

本学にとっては、2023 年度に大学基準協会から認証評価を受けるため、内部質保証会議や外部アドバイザリー委員会における評価や助言が、極めて重要なものとなる。内部質保証委員や外部アドバイザリー委員から寄せられた助言を反映させ、自己点検・評価報告書をまとめるとともに、内部質保証においても万全を期して臨みたいと考えている。

共愛学園前橋国際大学 内部質保証 点検・項目一覧表 (2021-2022年度前期)

基準	点検項目	評価の視点	エビデンス	概評 (改善点等を中心に)	評価の内訳				最終評価 21-22総合	認識率
					1 点検	2 改善	3 認識	4 公表		
1. 理念・目的	(1) 本学の目的	本学の目的が学内外に示されているか。	a) 大学パンフレット2022、2023 b) 公式ホームページ c) 共愛学園前橋国際大学学則 d) 入試要項2022、2023	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 本学の理念・目的は、学内では学則に明記され、学外では公式ホームページ及び大学パンフレットで内外部に示されている。また、本学の理念・目的に基づき、DP、CP、APが定められ、各媒体で広く周知している。また、現在はDPを達成するため、CPに基づいて新カリキュラムを構築中である。なお、本学の志願者に対しては、入学試験においてAPIに基づいたグローバルオナーズ区分を設け、本学の教育目的と育成したいグローバルリーダーの人物像を明確に示している。 本学は理念・目的を実現させるため、永続的に教育の質向上が図れるように理念・目的を具現化させる循環ができており、PDCAサイクルが有効に機能している。	○	○	○	○	S (外部アドバイザー選出)	1: すでに認識していた(75%) 2: 今回、認識した(23.8%) (1+2: 98.8% *9割以上で○) 3: 認識が十分でない、他(1.2%)
2. 内部質保証	(2) 内部質保証の体制	内部質保証の体制が学内外に示されているか。また、実際にどのような体制・活動となっているか。	a) 内部質保証プログラム・ガイドライン b) 内部質保証プログラム第3案 c) 共愛学園前橋国際大学 内部質保証委員会規程(第4案)	内部質保証ができる水準にあり、21年度前期に比して改善が図られている。 本学で明示された内部質保証の方針及び手続に基づき、内部質保証に係る自己点検・評価を実施した。2021年11月には第1回内部質保証会議を開催し、内部質保証に係る自己点検・評価報告書に基づき意見交換を行った。2022年1月には外部アドバイザー委員会を開催し、内部の視点だけではなく外部の視点から助言や提言を受けることができ、その結果をまとめた実績報告書を2022年3月末にはHPで公開した。なお、点検評価を受けて、本学では2022年度内に関連規程の整備を行なった。	○	○	○	○	A	1: 62.5% 2: 33.8% 3: 3.7% 1+2: 96.3%
3. 教育研究組織	(3) 教学マネジメントの体制	教学マネジメントの体制が学内外に示されているか。また、実際にどのような体制・活動となっているか。	a) 教学マネジメント推進本部案(企画運営会議20210421) b) 教学マネジメント本部規程案(企画運営会議20210421) c) 教学マネジメント組織と進捗状況(スタッフ会議資料20210810) d) カリキュラム編成部門会議議事録 e) 教学IR部門会議議事録 f) 教育実践部門WG議事録 g) 教学マネジメント本部会議議事録(22/10/19~)	内部質保証ができる水準にあり、21年度前期に比して改善が図られている。 教学マネジメント本部の役割は、教学IR部門によるエビデンスベースドの教育改善を進める機能を、組織として構築することにある。一方で、これまで教学を運営していた部署との調整、機能分化の整理に時間を要し、新たな人員配置も見送りとなったため、2021年度は、各部門毎の活動が中心となった。機能分化には新たな人的配置等が必要であり、2023年度からの本格始動が見込まれるが、2022年度の開始にあたり、2021年度の総括と2022年度の改善点を確認することはできた。なお、2022年度内に公式ホームページ等で教学マネジメントの体制を公表する計画を立てている。	○	○	○	○	A	1: 46.3% 2: 48.7% 3: 5.0% 1+2: 95.0%
4. 教育課程・学修成果	(4) 学修成果の可視化	学生の学修成果を可視化できる指標が明確に示されているか。また、学修成果の把握・可視化に効果的に取り組んでいるか。	a) 中央教育審議会大学分科会第6回質保証システム部会 b) 学修の手引き2021 c) シラバス2021・2022 d) 共愛キャリアゲート(KCG) e) コモンルーブリック f) エビデンスベースド自己評価システムKCG g) アセスメントポリシー(2018年7月教授会資料・大学HPで公開)	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 2018年にアセスメントポリシーを策定し、学修成果のより具体的なアセスメント方法について、大学(機関)レベル、教育課程(カリキュラム)レベル、科目レベルごとに明示し、検証を行っている。 特筆すべき、学修成果の可視化の取組は、エビデンスベースド自己評価システム「共愛キャリアゲート(KCG)」によるリフレクション(自己評価)、リフレクション面談・ポートフォリオ・ショーケースである。 学修成果指標は、2016年度に4年間の学修で身に付ける「共愛12の力」が明確に示され、コモンルーブリックで評価基準が設定されている。シラバスにも「共愛12の力」との対応が示されているため、学生にも分かりやすくなっている。2022年度のシラバスからは、「共愛12の力」の対応を示すだけでなく成績評価にも対応するため、学生は成績も参考に自己評価を実施することができる。 本学は独自の、学生自身が自らの学修成果を記録し、確認することができるエビデンスベースド自己評価システム「KCG」を構築し、リフレクション(自己評価)により、学修成果の可視化を行っている。KCGには、科目の履修状況とともに、「共愛12の力」の対応が蓄積されている。KCGには、日々の学修活動の記録を12の力と紐づけて、記録しておくことで、リフレクション時には蓄積された記録をエビデンスとして、ルーブリックによる自己評価を行うことができる。2021年度からは、KCGをPCからだけでなく、携帯からでも書き込みしやすいようシステムの改善を行い、日々の学修を「共愛12の力」と紐づけて投稿しやすくなることで、エビデンスベースドの学修成果の可視化の改善に取り組んでいる。 2023年度の新カリキュラムでは、科目群ごとに重視する「共愛12の力」を定め、コモンルーブリックも改定することで、学修成果の可視化の効果を高め、教育の質保証の精度を高める計画を立てている。	○	○	○	○	A	1: 81.3% 2: 16.2% 3: 2.5% 1+2: 97.5%
	(5) 学修成果の達成度	学生の学修成果を調査、検証しているか。また、数値はどのように推移しているか。	a) 2021年度学生アンケート(2,3,4年生)(補足資料) b) リフレクション課題 c) リフレクション記入率 d) リフレクション面談率 e) 共愛12の力自己評価4年間の成長度 f) 授業形態別12の力の獲得感 g) 授業形態別授業外学修時間(スライド) h) 授業外学修時間の推移 i) 単位修得率など、アセスメントポリシーに示しているデータ j) 卒業生アンケート(2022ベネッセ) k) 卒業生就職先企業の評価の変化(社会人基礎力) l) 卒業生就職先企業の評価(12の力)	内部質保証ができる水準にあり、21年度前期に比して改善が図られている。 資料e)が示すように、1年次から4年次(卒業時)にかけて、12の力の自己評価が順調に伸長している。4年間自己評価を実施した初めての卒業生となる2018年度と2021年度を比較すると、1年次の自己評価の数値が若干下がり、卒業時の数値が高くなっている。また、資料j)・k)・l)・m)等の資料から総合的に判断すると、リフレクションとリフレクション面談を重ねることで、より自己評価の妥当性が高まることにも、達成度も向上しているといえる。 学生アンケートの「共愛12の力」に係る設問で確認すると、5段階評価で平均3.96は、高い成果といえる。卒業時にルーブリックに示すレベル2を達成していることを目標とし、最高レベル4を12の力すべてで目指すことを目的としておらず、所属するコースや学生の個性に応じた伸長を期待している。 KCGの利用率は大学全体で94.6%と高い水準である。但し、学修成果の可視化の中心は学生であるため、利用率100.0%が求められる。また、リフレクション実施率、リフレクション面談率も100%になっていないため、100%の実施を目指す必要がある。	○	○	○	○	A	1: 56.3% 2: 42.5% 3: 1.2% 1+2: 98.8%
	(6) 学修成果の評価	学生が学修成果を自ら説明できる体制になっているか。また、数値はどのように推移しているか。	b) リフレクション記入率 c) リフレクション面談率(スライドに追加)	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 リフレクション(自己評価)およびKCG+Sの作成により、学生は学修成果をエビデンスに基づいて客観的に自ら説明できる体制になっている。 一方で、リフレクション(自己評価)およびKCG+Sの作成が100%になっていない。コロナの影響により、大学でのリフレクション実施が2年次のみとなり、3・4年次は各自で実施しているため、全員の実施が難しい状況であるが、学生への支援を継続していく必要がある。	○	○	○	○	A	1: 60.0% 2: 33.8% 3: 6.2% 1+2: 93.8%
(7) 授業計画の状況	シラバスどおりに授業が行われているかを調査、検証しているか。また、数値はどのように推移しているか。	a) 2021年度学生アンケート(2,3,4年生) b) 2021年度前期最終授業アンケート結果の分析・検証 c) 2021年度後期最終授業アンケート結果の分析・検証 d) 2022年度前期授業アンケート(全科目集計)	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 後期最終授業アンケート結果の分析・検証で確認すると、学生の98.4%が授業はシラバスどおりに実施されていると回答し、前期のアンケート結果より約3ポイント上昇した。Googleフォームでアンケートを実施しているが、前期は49.2%、後期は40.3%の回答率であり、対面のアンケートでは80数%の回答率があるため、Googleフォームのアンケート回答率を上げていく方法を検討する。	○	○	○	○	A	1: 55.0% 2: 42.5% 3: 2.5% 1+2: 97.5%	

共愛学園前橋国際大学 内部質保証 点検・項目一覧表 (2021-2022年度前期)

基準	点検項目	評価の視点	エビデンス	概評 (改善点等を中心に)	評価の内訳				最終評価	認識率
					1	2	3	4		
					点検	改善	認識	公表	21-22総合	
5. 学生の受け入れ	(8) 授業の達成度	授業の目標達成度を調査、検証しているか。また、数値はどのように推移しているか。	a) 2021年度学生アンケート(2,3,4年生) b) 2021年度前期最終授業アンケート結果の分析・検証 c) 2021年度後期最終授業アンケート結果の分析・検証 d) 2022年度前期授業アンケート(全科目集計)	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 後期最終授業アンケート結果の分析・検証を確認すると、本学の94.0%がこの授業の目指す到達目標を達成していると回答している。前期のアンケート結果でも89.1%と高い評価を得ており、授業アンケート結果からは高い数値を維持している。上記結果から学生はシラバスを読んで理解していることと判断する。	○	○	○	○	A	1 : 58.8% 2 : 40.0% 3 : 1.2% <b>1+2 : 98.8%</b>
	(9) 学生の授業満足度	授業を学生がどのように評価しているかを調査、検証しているか。また、満足度はどのように推移しているか。	a) 2021年度学生アンケート(2,3,4年生) b) 2021年度前期最終授業アンケート c) 授業アンケート満足度の推移 d) 2021年度前期授業アンケート検証資料(10月教授会) e) 2022年度授業アンケート改定案(2022年3月教授会) f) 2021年度教学IR部門会議資料(2022年3月8日) g) 2022年度前期授業アンケート(全科目集計)	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 2021年度後期最終授業アンケート「総合的に見て、あなたは授業をどのように考えていますか」の設問では92.2%の学生が授業を評価できると回答し、前期のアンケート結果よりも約2ポイント上昇した。中間アンケートにおいても5段階評価で4.45ポイントと高い評価を得ている。この結果から学生は概ね授業に満足していると判断する。	○	○	○	○	A	1 : 57.5% 2 : 40.0% 3 : 2.5% <b>1+2 : 97.5%</b>
	(10) ディプロマ・ポリシーの達成度	卒業時にDPの達成度を調査、検証しているか。また、達成度をどのように多面的に検証しているか。	a) 2020年度卒業時アンケート・2021年度アンケート b) 共愛12の力自己評価4年間の成長度の比較 c) 卒業生アンケート(2022ベネッセ) d) 卒業生就職先企業の評価の変化(社会人基礎力) e) 卒業生就職先企業の評価(12の力) g) 各授業科目における到達目標の達成度 h) 学位の取得状況 i) 学生の成長実感満足度 j) 学修時間 k) 卒業後の進路決定状況 l) 卒業率、留年率、退学率	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 アセスメントポリシーに則り多面的に検証している。卒業時アンケートを確認すると、5段階評価で平均値は4.28であった。また、リフレクション(自己評価)においても同様の結果が得られている。卒業生アンケートでは、他大学に比べても大学で身につけた力が相対的に高く、実社会で必要な能力と共愛12の力との乖離がないことが検証できた。卒業生の就職先企業への調査でも、相対的に評価が高くなっている。一方で、いくつかの力については、改善の必要があることが明らかになっているため、新カリキュラムで対応できるように計画を立てている。	○	○	○	○	A	1 : 45.0% 2 : 50.0% 3 : 5.0% <b>1+2 : 95.0%</b>
	(11) 海外研修等への参加度	本学には、どのような海外プログラムがあるか。またどれだけの学生が、それらのプログラムに参加しているか。	a) 海外研修・オンライン研修参加人数 b) GCAnow2021年4月度～2022年10月度 c) 海外留学・研修プログラム(GLocal office HP公開) d) 活動報告(GLocal office HP公開)	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 「語学を学ぶ」だけでなく、「海外で働く人の姿を見る」、「海外の習慣や文化を学ぶ」、「海外の日常生活を肌で感じる」など様々な体験型の研修を開発・実施してきた。コロナ禍の2020年度からはCOIL(Collaborative Online International Learning)を開発実施している。また、GLocal officeで、2021年度はコロナ禍に対応したオンライン海外研修を実施した。毎月ニューズレター「GCAnow」を発行し、海外プログラムや海外語学研修の実施状況を学内に共有している。	○	○	○	○	A	1 : 68.8% 2 : 31.2% 3 : 0% <b>1+2 : 100%</b>
5. 学生の受け入れ	(12) アドミッション・ポリシーの状況	アドミッション・ポリシーが明確に示されているか。また、アドミッションポリシーに基づいた入試が行なわれているか。学生がAPを認識しているか。	a) 大学パンフレット2022、2023 b) 公式ホームページ c) 2021年度新入生アンケート(1年生) d) 入試要項2022、2023 e) 広報用リーフレット	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 入学前に受験生と接することができる進学ガイダンスや大学見学、オープンキャンパスでAPの周知徹底を図るとともに、入学選抜において評価項目に取り上げたり、出願時の提出書類でAPの理解度、認知度を確かめたりしている。また、APは学力の三要素を測る意味でも必要不可欠であるため、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」においてAPに関連させた回答を重要視している。さらには、志望理由書において外国人留学生、社会人、帰国生入試にも適用しており、入試区分に関係なく、学部生共通でAPの理解力・認知度を確保している。	○	○	○	○	S (外部アドバイザー選出)	1 : 68.8% 2 : 30.0% 3 : 1.2% <b>1+2 : 98.8%</b>
	(13) 定員充足率の状況	入学定員が満たされているか。	a) 大学基礎データ(学生の受け入れ) b) 入学者アンケート c) 公式ホームページ	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 私学事業団がまとめた2021年度の入学志願動向調査によると、定員割れの大学は46.4%である。本学は過去18年間にわたって入学定員を充足し、21年度には333名、22年度は323名(定員はいずれも299名)の入学者があった。 但し、国際社会学科としての定員は充足しているが、専攻別で確認すると、地域児童専攻は2016年度を除き、定員を充足していない状態である。地域児童教育専攻は、教員免許取得のための教育を全学に提供している一方で、入学者アンケートで確認すると、オープンキャンパスの参加率が国際社会学科専攻に比べ低いため、2つの専攻で同じ募集戦略を行うよりも、専攻ごとの募集戦略を検討する必要がある。	○	○	○	○	A	1 : 70.0% 2 : 27.5% 3 : 2.5% <b>1+2 : 97.5%</b>
6. 教員・教員組織	(14) FDの状況	FDは本学の目的を達成するために実施されているか。	a) 2020-2021年度のFD開催実績 b) FD実施状況(過去6年間の開催実績)	内部質保証ができる水準にあり、21年度前期に比して改善が図られている。 本学では毎年2回、FD研修会を実施している。2020-21年度については、現在導入を準備している新カリキュラムについて、全専任教員による検討や意見交換を行なった。今後は、FDの実施状況をMS側にも共有し、教学に対する同じ目標、同じ目的に向かえる体制を整えること、また、2022年度中に公表する計画を立てている。	○	○	○	○	A	1 : 70.0% 2 : 28.7% 3 : 1.3% <b>1+2 : 98.7%</b>

共愛学園前橋国際大学 内部質保証 点検・項目一覧表 (2021-2022年度前期)

基準	点検項目	評価の視点	エビデンス	概評 (改善点等を中心に)	評価の内訳				最終評価	認識率
					1	2	3	4		
					点検	改善	認識	公表	21-22総合	
7. 学生支援	(15) 学生相談の状況	学生が快適に大学生活を送れる支援体制が整備されているか。	a) 2009-2021学生相談数推移 b) News Letterの発行 c) 学園報への寄稿 150号4P d) 共愛学園前橋国際大学論集での発表 f) 相談パンフレット g) DE&I規程 h) 2022年度8月スタッフ会議スケジュール i) 第31回発達を支える現場に携わる人たちの会ご案内 j) 2022年度前期 DE&I推進室利用者集計報告_20221025	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 本学の学生来談率は過去5年間の平均値は4.9%であり、5,000人未満大学の来談率は4.5% (2018年度217機関)であるため、若干高い傾向にあるが、これは相談しやすい本学の体制を表していると考えられる。また、今年度より相談室の場所を移動し、学生相談の利便性を高めている。 2016年度に改善すべき事項として取り上げた、障がい学生支援に関する、学生および教職員間の情報共有等の諸課題について検討や試行を続けてきた。年々学生をとりまく環境や社会情勢も変化し、障がい学生の支援のみにとどまらず、各部署での学生支援については、部署同士の円滑な連携の必要が望まれ、また近年のダイバーシティ・エクイティ&インクルージョンの考え方が本学の「共愛・共生の精神」の理念に沿うことから、より広範囲で手厚い学生支援を目指して2021年度に「D&I推進室」を新設し、2022年度に「DE&I推進室」に名称変更している。	○	○	○	○	A	1 : 73.8% 2 : 25.0% 3 : 1.2% <b>1+2 : 98.8%</b>
	(16) 進路支援の状況	学生が進路支援を受けられる体制が整備されているか。	a) 4年生キャリアセンターの利用率(4年生全員面談含む) b) 早期キャリア形成のための面談実施率(2年生全員面談含む) c) 高い県内就職希望に対する地元就職のキャリア教育と県内就職率 d) 進路支援の結果としての、学生の就職先満足度 e) 2021年度4月4年生全員面談実施結果 2021年度キャリア相談実績 f) 2021年度8月2年生全員面談実施結果 g) 2021年度4月進路希望調査 h) 2021年度3月進路決定調査	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 キャリア教育科目は、キャリア教育グループ(旧キャリアワーキンググループ)にてキャリア科目における学修状況や課題、次年度に向けた科目設計などについて議論・検討している。就職活動支援は就職支援グループにて、支援施策の確認や、実績報告、課題共有を通じて、産業界や学生等のニーズを捉えた支援の検討と実施を行っている。いずれも学部長をはじめ、科目を担当する教職員等から構成されており、教職協働の体制で、教育と学生支援の両面の観点から科目やプログラムの設計をしている。 PDCAサイクルは、各科目や施策に応じ、グループにて計画段階の相談、実施状況の共有、課題の共有、活動の評価、次年度に向けた施策等の検討の流れでまわしている。	○	○	○	○	A	1 : 63.7% 2 : 32.5% 3 : 3.8% <b>1+2 : 96.2%</b>
8. 教育研究等環境	(17) 授業外学修時間の状況	学生の授業外学修時間を調査、検証しているか。また、どのように数値は推移しているか。	a) 2021年度学生アンケート(2,3,4年生) b) 2021年度前期最終授業アンケート結果の分析・検証 c) 授業外学修時間調査 d) 2022年度前期授業アンケート(全科目集計)	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 1科目あたりの授業外学修時間を調査した結果、2021年度前期は平均で1時間26分、後期は1時間27分とほぼ同じ時間数となった。学年が上がるにつれて時間数は増加し、4年生は2時間を超えている。 但し、同じ学年でもコースによって差があることから、現在検討しているカリキュラム改編により、全学的な共通教育の見直し及びキャップ制の改善により単位制度の実質化を図る必要がある。	○	○	○	○	A	1 : 45.0% 2 : 50.0% 3 : 5.0% <b>1+2 : 95.0%</b>
	(18) 図書館の利用状況	利用者数・貸し出し冊数などを調査、検証しているか。また、どのように数値は推移しているか。	a) Student's Web図書館利用推移統計 b) Student's Web利用統計 c) Student's Web企画コーナー d) サイボウズ教授会(2022.5.25)資料「2021年度図書館利用状況」 e) サイボウズ図書館運営G会議事録 f) ラビタデスク利用者数	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 2017年度から入退館システムを導入し、利用者や冊子数がデータベース化されている。新型コロナの影響で図書館の利用者数は減少傾向にあるが、感染症対策と安心して利用できるよう努めたため、貸出冊数は増加傾向にある。また、電子図書館LibrariEを導入し、開館時間に捉われない資料の利用を可能にしている。 現在は学内ではデータを公表しているが、今後は外部にもデータを公表すれば、図書館の魅力や利用しやすさなどもステークホルダに伝えることができる。また、図書館を利用する特定の学生は、図書を多く借りる傾向が見られるため、例えば、IRを活用して図書館の利用率と成績との相関関係を検証すれば、図書館利用の有効性を可視化でき、PDCAサイクルで図書館の質を高めることができる。	○	○	○	○	A	1 : 43.8% 2 : 52.5% 3 : 3.7% <b>1+2 : 96.3%</b>
	(19) 不測時(コロナ禍)の教育状況	不測時(コロナ禍)においても学生の学びを継続できる教育環境となっているか。	a) 2021年度前期最終授業アンケート結果の分析・検証 b) 2021年度学生アンケート(2,3,4年生) d) 2022年度前期履修登録関連報告	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 本学は不測時においても学生の学びを継続できる学修環境を備えている。前期授業アンケートを確認すると、対面授業と遠隔授業(アクティブラーニングを除く)とも学生から高い評価を得ている。なお、2020年度前期(コロナ期初頭)はほぼ全科目で遠隔授業を実施したが、後期は94.7%で対面授業を実施している。 教員・学生ともにLMS(Moodle)の使い方に慣れ、2021年度後期授業アンケート結果から授業の満足度において対面授業が平均で4.6、遠隔授業が4.45と遜色なく実施できていると判断できる。教室設備においては、2021年度後期より大講義室にリアルタイムで配信及び録画できる機材を完備し、受講生が対面と遠隔に分かれてハイブリックス授業ができるようになった。なお、2021年度後期は、引き続き感染拡大防止対策を講じたうえで83.6%を対面授業で実施したが、22年度前期の対面授業率は92.9%と上昇してきている。	○	○	○	○	A	1 : 72.5% 2 : 26.3% 3 : 1.2% <b>1+2 : 98.8%</b>
	(20) DXの推進状況	新たなデジタル技術を活用し、教育研究環境を向上させているか。	a) DX事業推進自己点検評価 b) 共愛学園前橋国際大学 デジタルを活用した大学・高専教育高度化プラン c) 4教室をハイブリッド授業対応教室に改修(20210917大学HP公開)	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 教育領域のDX推進と、大学運営領域のDX推進と事業を明確に分けて、自己点検・評価が実施されている。特に教育領域DXでは、AIを用いた個別最適化学習システム(KOL)が本格始動した。また、2021年度は4教室をハイブリッド授業対応教室に改修し、オンデマンド動画制作の利便性を高める動画撮影専用スタジオ「KYOA Studio」を設置し、教育研究環境を改善した。 1本学の全教職員が参画するスタッフ会議において、DXの進捗状況が報告され、学内での共通認識も図られている。本取組は、2022年度秋頃に日本学術振興会または文部科学省HPにて公表が予定されている。	○	○	○	○	A	1 : 60.0% 2 : 35.0% 3 : 5.0% <b>1+2 : 95.0%</b>

共愛学園前橋国際大学 内部質保証 点検・項目一覧表 (2021-2022年度前期)

基準	点検項目	評価の視点	エビデンス	概評 (改善点等を中心に)	評価の内訳				最終評価 21-22総合	認識率
					1 点検	2 改善	3 認識	4 公表		
	(21) SDGsへの対応	キャンパスの教育研究環境がSDGsに対応しているか。SDGsに関連するプロジェクトを実施しているか。	a)本学SDGs公式ホームページ b)SDGsに関する授業の開講(前川先生の授業シラバス) c)SDGsに関する定期ニュースレターの発行(ブランディングから岸さんが月一で発行して下さっているニュースレター) d)群馬県認定SDGsファシリテーターを輩出(県からの通知) e)学生のSDGs展示イベント(12月のイベント終了後にSDGsHPに掲載します) f)SDGs推進委員会議事録	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 12022年4月にSDGs推進委員会を設置し、SDGsへの対応に取り組んでいる。SDGsに関する授業を開講し、学生のSDGsへの関心と理解を深めている。学生たちのSDGsへの取組み事例は、SDGs展示イベントの開催や本学SDGs公式ホームページへの掲載、SDGsに関する定期ニュースレターを発行するなど公表を行なっている。	○	○	○	○	A	1: 61.3% 2: 35.0% 3: 3.7% <b>1+2: 96.3%</b>
9. 社会連携・社会貢献	(22) 大学の社会連携・社会貢献	本学の教育活動を地域社会と結び付けているか。	a)めぶく。プラットフォーム前橋_取組方針(第6回協議会20210927) b)めぶく。プラットフォーム前橋_中長期計画ロードマップ(第6回協議会20210927) c)公開講座2021チラシ d)めぶく。プラットフォーム前橋_総会会議報告(第4回総会20220307) e)ぐんま未来イノベーション会議(第4回企画委員会資料20220415) f)群馬現代史研究会ご案内 g)「上毛を学ぶ」ご案内 h)「子育てひろば」ご案内	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 本学は産学官連携基盤推進協議会『めぶく。プラットフォーム前橋』に参画し、大学の活性化や魅力向上に努め、『地域で学び・地域で働き・地域に生きる』人材の育成・定着化を図っている。また、系列校以外の太田市立高校等との高大連携や地元・筑井小学校との連携、地域をテーマにした公開講座等を積極的に実施し、地域に根差した教育活動を行っている。さらに、産学官金共創「ぐんま未来イノベーション会議」に参画し、地域経済の活性化を図る取組に力を入れている。	○	○	○	○	S (外部アドバイザー選出)	1: 81.3% 2: 17.5% 3: 1.2% <b>1+2: 98.8%</b>
	(23) 学生の社会連携・社会貢献	学生の学修成果を地域社会と結び付けているか。	a)トレードフェアホームページ b)群馬イノベーションアワードホームページ c)共愛チャレンジひろば案(企画運営会議20211013) d)共愛チャレンジひろば(2021年度後期進捗・実績) e)前橋市と包括連携協定を締結している事業者のSDGsの取組(抜粋)	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 本学は、京都のトレードフェアや群馬イノベーションアワードに毎年出場するなど、大学での学びと社会を結び付けている。また、共愛COCOやPBLや長期インターンシップ制度などの地域連携教育を実践している。さらに、新たな「教育の質保証」の取組として、本学企画調査室が中心となり、学生が総合学園の資源を活かした学びの質保証ができる取組を計画し、2022年度から実施するための準備をしている。なお、ゼミ活動の一環として行なっている「前橋親善大使」(鈴木ゼミ)や、共愛ファームや自然体験活動応援隊、「奥田ゼミ in Maebashi Tiny Market」や「Kyoai Slow City」などSDGsの取組を行なっている学生団体が8団体ある。	○	○	○	○	S (外部アドバイザー選出)	1: 82.5% 2: 17.5% 3: 0% <b>1+2: 100%</b>
10. 大学運営・財務 (主に事務組織)	(24) 中期計画の状況	本学の目的を達成させるための中期計画が策定されているか。	a)2021-2023年度中期計画 b)2018-2020年度中期計画実績報告書 c)学園報2021年報夏号 d)2022年度事務局中期業務計画	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。 第1期中期計画の課題が改善されている。具体的には、選択と集中により目標数を厳選し、3ヵ年計画で各目標が達成できるよう形式を再設計した。その改善により、各計画がPDCAサイクルでまわるようになっていく。なお、学内だけでなく学外にも中期計画の年度実績報告書を公表する計画が立てられており、2022年10月末までに実施する予定である。	○	○	○	○	A	1: 63.7% 2: 30.0% 3: 6.3% <b>1+2: 93.7%</b>
	(25) SDの状況	SDは本学の目的を達成させるために実施されているか。	a)第388回～393回事務運営会議議事録 b)スタッフ会議議事録 c)本部事務局合同研修会の資料	内部質保証ができる水準にあり、21年度前期に比して改善が図られている。 現在はOJTのほか、事務運営会議やスタッフ会議での研修、本部事務局合同研修会、外部研修機関での能力開発を中心とした研修を受けている。研修参加者は報告書を提出するとともに事務運営会議において発表し、情報共有も図っている。今後はFDとSDを連動させれば、DP達成の目標に向かって教職員間で共通認識が図れる組織になり、本学の教育の質を高める結果となる。また、SDの取組状況も教育の質に係る客観的指標になるため、公表を検討する必要がある。	○	○	○	○	A	1: 53.8% 2: 40.0% 3: 6.2% <b>1+2: 93.8%</b>

4段階評価基準

4項目指標

認識率調査アンケート

区分	評価	判定	状態	4項目	指標	○	×	△	選択肢
内部質保証ができる水準にある	S	内部質保証ができる水準にあり、特筆すべき事項が認められる。	4項目指標のレベルがすべて満たされている。また、各取組がPDCAでまわるとともに、顕著な成果が認められる。	1.点検	内部質保証のための点検・評価が実施されている。	達成	未達成	2022年度 達成見込み	1.以前から認識していた
	A	内部質保証ができる水準にあり、すぐれた事項が認められる。	4項目指標のレベルがすべて満たされている。また、各取組がPDCAでまわり、質を向上させている。	2.改善	内部質保証のための点検・評価により見出された課題が改善されている。または、課題点は特になし。	達成	未達成	2022年度 達成見込み	2.この機会に認識した
	B	内部質保証ができる水準にある。	項目1・2を含め、3つの指標レベルを満たしている。	3.認識	改善内容または現状特に問題ないことが、学内(教職員)で共通認識されている。	達成	未達成	2022年度 達成見込み	3.認識が十分でない、よくわからない、その他
内部質保証ができる水準にない	E	水準に適合せず、改善が求められる。	項目1・2のいずれかの指標レベルが満たされていない。または項目3・4がどちらも満たされていない。 基準には適合しているが、見劣りする結果や課題がある。	4.公表	点検・評価結果が学外に公表されている。	達成	未達成	2022年度 達成見込み	※回答率 TS: 36/39 = 92.3% MS: 44/52 = 84.6% <b>全体: 80/91 = 87.9%</b>